

## 水泳競技の豆知識3

### 視覚障害者のタッピング

#### 1、視覚障害者のスポーツでは

夏のパラリンピックで視覚障害者が参加できる競技として陸上、水泳、柔道、ゴールボール(視覚障害者独自の球技)等があります。陸上では伴走者が一緒に走ったり手をたたいて投げたり跳ぶ方向を教えるなど工夫をして競技を行います。

#### 2、水泳競技では

水泳競技では S11 クラス(視力0)、S12(視力0.03までと視野5度以下)の選手はタッピング(壁を知らせる為の合図)を行います。

特に S11(視力0)のクラスの選手は 全力で壁に進んで行く時、安全確保や恐怖心を取り除く為に壁の手前で 体の一部に合図をすることが義務付けられています。

日本では 頭を壁の手前で叩き 合図を出します。個人差もあるので 合図を出す距離は 泳力によって異なります。外国では壁から5mくらいのところで合図をする国もあります。

日頃の練習では ストローク数(手をかく回数)を勘定したり、ゆっくり泳いだりするので ベテランの選手では必要の無い場合もあります。競技の時には0.1秒でも速く泳ぐために 必要になってきます。またターン時でも 重要な要素になります。合図を出してから クイックターン(自由型)やロールターン(背泳)をするのですから 合図者と2人3脚で 練習をしなければなりません。0.2秒速いと壁に足が届かず また0.2秒遅いと 壁に激突してしまい 選手の記録に大きく左右します。

#### 3、タッピングの難しさ

泳ぐスピードが速いほど、タイミングが難しいといえます。

種目では、バタフライで、たたく距離感が難しいと言えます。頭が水面上であったり、水面下であったりするからです。たたく距離が近くなりすぎた場合はすばやく 2回たたくなどの工夫で壁に激突するのを避ける合図をしています。

また、背泳ぎのタッピングも非常に難しいと言えます。

回してくる手がタッピングの棒に引っかかる可能性が高く、また顔が上を向いているので、たたく部分が狭く、コーチとの練習の積み重ねが必要です。

#### 3、タッピングの素材は何でできているの？

初期はモップの棒にヘルパーを付けたものでしたがタッピング技術の進化に合わせて軽く頑丈にする為に現在では つり竿のグラスファイバーにウレタンの素材で手作られています。

今回のアテネでは、より軽くて使いやすい製品をヤマハ発動機株式会社が手作りのものをボランティアで提供してくれています。

4、 タッピングの長さは？

選手のレベルと種目によって異なりますが約 100cmから 240cmまでの長さを使い分けています。

クローラーは短めで 100-150cm程度 その他は150 200cm程度です。

5、他の国ではどうしている？

特に現在ではタッピング棒については ルールが無いために国々で異なります。

白状で直接叩く国もあれば テニスボールを棒の先につけたり、ヘルパーやビート板の素材を加工してとりつけている等 あります。

日本の製品は良くできていると、他国から欲しがられます。





タッピング練習風景



シドニーパラリンピックでの風景